
約束

星河 翼

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束

【Nコード】

N3245D

【作者名】

星河 翼

【あらすじ】

喫茶店『カリブ』のマスターである五十嵐。そのお店に、一人の日本人形のような少女が現れた。何処の学校の制服なのかも判らない。初めて訪れた、お客。でも彼女は、この喫茶店で逢えるかどうか分からない、この喫茶店の桜の下で約束したという少年を待っていると言う。その結末は？

#1 不思議なお客

春休みに入る一日前。

それは、学生達の心を解放へと導く時期であつた。

ここ、『カリブ』という喫茶店は、一年前建てられた。

そして今では直ぐ近くにある二葉女学院の学生たちの憩いの場所となっている。

テンポの良い軽快な有線の流れる、おしゃれなカントリー風の家具を基調とした店内は、『カリブ』のマスターである五十嵐と、バイト生の二人で成り立っていた。

今、朝の時間はそう忙しくないの、バイト生は昼から来てもらうことになっている。

それにしても学生ウケしそうな、ちょっと凝った内装は、まさに学校帰りの女学生の気をそる喫茶店であつた。

出窓に、木枠の窓ガラス。外には五本の桜の木が植えられている。今はまだ蕾ではあるが、あと一週間もすれば淡いピンク色の花を咲かせるであろう。

マスターの五十嵐は、三十前後にしてまだ若く、それにしてはダンディーな容貌が人気の一つであり、気さくで話し上手な所は女生に好評であつた。

今は、十二時前、学校が終わるにはまだ早い時間のそんな時計の針を気にしつつ、何と無しげに五十嵐はそんな帰宅の女学生を待ちわびるかのように、朝訪れたお客の洗い物をしていた。

「確か、こんな陽気のことだったな……」

何かを思い出すように五十嵐は思わず口に出していた。

不思議な少女の事。

それは、今でも鮮明に思い出せることが出来る。あんな貴重な体験を忘れれるはずが無い。泡立ったお皿を眺めながら、思い出に浸

っていた。

『カラン、カラン……』

そんな思い出から目覚めるように、五十嵐は今入ってきたお客に気が付き、

「いらつしやいませ」

お決まりの挨拶を交わす。いつもやってくる、二葉女学院の雅美と、佳子のグループであった。

「マスター！いつものお願いね！」

常連客の嗜好品はよく理解していた。

五十嵐は、いつもと変わらない日常がまた始まるのだとそう確信した。

1年前――

今のように洗い物に気を取られていた五十嵐は、一人の儂げな透き通るような白い肌に艶のある流れる黒髪。日本人形のような容貌。セーラー服の腰までではないかと思われる長い髪を揺らし、潤んだ黒目がちな美少女が、自分の目の端に入ったことに気が付いた。

「あ……いらつしやいませ」

面食らったように言葉を発した。

それもそのはず、ドアにカウベルが設置されているはずなのに、壊れているのか？鳴った記憶が無かった。

少女は、五十嵐に気をとられることも無く、足早に、入り口から三列目の出窓のある席に優雅に座った。

五十嵐は、このお客に何故か一種の目ぼれのような感覚を覚え、お近づきになりたいなと早速、注文を取りに席に歩いていった。

「ご注文は、お決まりでしたらお申し付けくださいませ」

社交辞令のような言葉で、ハキハキと伝える。

しかし、少女は、

『何故そんなこと訊くの？』

と、不思議そうな目で五十嵐を見上げたのである。

「……それでしたら、レモンティーをお願いできるかしら？」

少女は一瞬考えるようにしてから軽く口の端を引き上げるようにして微笑んだ。まるで、初めて笑ったかのようなぎこちない笑顔であることに気が付き、五十嵐は言葉少なげに、

「ありがとうございます」

と、そそくさとカウンターへと戻る。

そして、セイロントーを茶こし器にかけ、出来上がるのを確認する。しかし、その合間ちらちらとその少女を見ていた。

#1 不思議なお客（後書き）

ほんのりと淡いテイストのファンタジー小説です。
短いお話ですが、何とか章に区切ってみました。
春に書いた作品なので、春らしいテイストですが、甘酸っぱいものが心に残れば幸いです。

#2 愛と充弘「1」

「この桜の木、切り落とさなかったんですね？」

少女は天使のような声で少し嬉しそうに囁いた。

意外だった。無口なのかと思っていたからである。まさか、少女のほうから話しかけてくるなんて思ってもいなかった。

「そうなんですよ。あの桜の木は、この名物になると思いましたから」

広々と勢いよく伸びる枝。その貫禄は申し分が無い。この店は元々空き地として放置されていた売り地をある筋から借り受け、ちょうど半年前に建てられたのである。

「ありがとう」

少女は、窓の外のまだ桜の蕾を見つめながら答えた。

何故『ありがとう』と言ったのか解らなかったが、思い入れのある木なんだろうと思いを巡らせた結果、

「あなたは、この桜の木に何か思い出でも有るのですか？」

五十嵐は、ここぞとばかりに話に乗った。こんなチャンスは無いと思ったからである。

少女が身に纏っている制服は、この街の何処にも存在しないセーラー服だから、きつとわざわざこの地に足を運んできたのではなからうか？そう推測した。そして、この喫茶店に立ち入ったのだろうと推測した。そして、この喫茶店に立ち入ったのであると。

「思い出……そうですね。もう昔のことなのですが、素敵な思い出です」

昔というのは変な話だ。この若さで昔なんて言葉を使う彼女はそんな年には見えない。

それとも、最近の子は幼少のことをそう言う様になったのか？いや、そんなはずは無いと頭を横に振る。

『もしかして、今流行の何ちゃって高校生？』

たまに、学生風を装って制服を着ているものが居るとか……そんな話を聞いたことがある。この少女もそうなのか？

「まだまだ若いのに、昔なんて事言ったら笑われますよ？」

出来上がったセイロンティーが入ったカップの花柄の受け皿に、冷蔵庫から取り出した、半透明のタッパに入っている輪切りのレモンを添えると少女の座っているテーブルに運びながら、五十嵐は苦笑いした。

「そうでしょうか？」

少女は気の無い振りをして桜の木を眺めていた。

その前に、五十嵐は腰を掛けた。籐で出来ているその椅子が『ギシッ』と軋む。

「誰か待つてるんだ？」

五十嵐は、ボーッと外ばかり眺めている少女に向かって、もしかしたら待ち合わせでもしているのだろうか？とそう感じた。

「来ないかもしれない……でも約束を破るような人ではないってそう信じているから」

少女はここにきて初めて五十嵐の顔を覗き込んだ。

「不思議なことも有るものなのですね？」

今度は、目を閉じて目尻が下がると綺麗な笑顔を見せてくれた。

五十嵐はそれにつられて微笑み返した。その言葉がどういう意味を持っ語られているかなど気にもせずに。

それだけ、彼女の笑顔は魅力的だった。

「待ち人が来るまで、宜しければ、その思い出話などにお付き合いしますよ」

五十嵐がそう言ってしまうほどに……

真冬の太陽は人々から遠ざかるかのように色を落としていた。

吐く息はとても白く、行きかう人の群れはその白い世界の中で鮮やかな原色に彩られ、生き生きしている。

「充っちゃん待つて！」

長い三つ編みの少女が、先を急ぐ少年に向かって早足で駆け出していた。

「愛！おい、走るなよ。まだ雪残ってるんだから。こけて頭でも打ったら笑うに笑えないぞ！」

充弘はそう告げると、後ろから子犬のように走って来た愛に向かってそう告げる。愛は、その言葉を知らん顔で受け止めると、充弘の右腕にしがみつく。

「今日は、映画観に行くって話でしょ？凄く楽しみにしてたのに、何でキャンセルなの？」

少し膨れっ面をする頬がこの寒さの中赤く染まっている。それがあどけなくて、充弘は返す言葉を失いそうになった。

「……雪。また積もりそうだから、早く帰ろう？熱出たらまずいし」

愛は、幼い頃から身体が弱く風邪をこじらせては肺炎を起こす体質で、幼馴染の充弘はその事を熟知していた。

「熱なんか出ないよ。凄く凄く楽しみにしてたんだから！ね？」

しかし、充弘の返事はダメの一点張り。

「おばさんに言われてるの！愛が今度熱出したりしたら、二度と遊びには出させませんってね！」

幼馴染のこの愛と充弘は、アパートのお隣同士の同級生。何をするにも一緒に育ってきた。端からみれば仲の良い兄妹のように見えるであろう。

「お母さんの言う事、真に受けちゃってさ……」

愛は詰まらなさそうに、道端に転がっていた小石を軽く蹴飛ばした。「もっと暖かい日にしよう？な？」

充弘は、そんな愛の気持ちを汲んでかそう言うと、近くの駅へと足を伸ばした。

愛の言う事は、何でも聞き入れてきた。充弘は愛のことを心の底から好きだったから。

だけど、それも今日で終わり。そう解っていたから、映画を見るに

行きたいって言った言葉を受け入れた。そうでなければ、こんな真冬の寒い日に愛を連れ出そうとは思わない。

約束はいつ果たされるのであろうか？

心にそう思い描くが、まったく予測が付かない。もし、明日、愛が……自分が、父の会社経営失敗の為に、突如九州に引越すことを知ったとしたら、どう思うのであろうか？

嘘つき呼ばわりされるであらうか？

一生この自分を許してくれないのではなからうか？

そんな事が帰り道、頭に過ぎったのであった。

#3 愛と充弘「2」

「充っちゃん！どう言う事なのこれは？」

次の日、引越しの準備を全て終えて、愛の家に充弘と母親は挨拶に訪れた。

「ごめん。俺、引越すって事愛に言いづらくて黙ってた……」

愛の顔は怒りに満ちてるというより、ショックで悲しそうであった。

「映画、見に行く約束は？」

「ごめん。約束を破って……でも、愛の身体に支障が出ない時、あの広場にある桜が咲く時、必ず会いに来るから！だから……」

守れる約束？充弘は躊躇いがちに答える。

「手紙……頂戴ね？」

愛はどうしようもない悲しみに打ちのめされていた。他所の土地に馴染んでしまった充弘が、自分のことを忘れ去るのではないか、その心配。

「もちろん書くよ！だから待ってて！今度こそ約束を守るから！」

充弘は、それだけ言々と母親と共に愛の家を後にした。

「……嘘つきは嫌いだよ」

ゆっくりと閉まるドアを見詰めながら愛は囁いた。

「へー。じゃあ、その充弘君が今日ここにやって来るんだ？」

五十嵐は、その幼馴染みの子に興味をしました。こんな可愛い子を彼女に持っているなんて羨ましい限りだ。

「あの桜の幹に、子供の頃にちよつとした悪戯で小さく刻み込んでいるんですよ。約束の代わりにつて、充っちゃんが……」

愛は送られてきた手紙に書かれていたことで知ったという。いつまでも大事にしまっておいた手紙。日付がそれに書かれていた。毎年この日に逢おうつて。

「長距離恋愛なんだね……凄く大変じゃ無い？おじさん感心するな」

人は、馴染んだ土地にいつしか身を置くことになる。それが一番心地いいから。

「あ、冷めちゃうよ？レモンティー」

話に耳を傾けることで、すっかり忘れていた。いまだに愛は、紅茶のカップに手をつけていない。

「私、猫舌なんです。もう少し冷めてからのほうが良いかなと思った物ですから」

愛は微笑んでいた。

「そう？なら良いんだけど……」

出来れば、温かいうちに飲んでほしいなと思ったが、本人の意思を捻じ曲げてまで強制するつもりは無かった。

そこで、五十嵐はそんな愛に、一つの質問をした。気になるのはその少年のこと。

「じゃあ、充弘君でどんな感じの子なの？」

再び愛の話は始まった。

「また、愛をいじめてるな！お前らそれしか脳ねえのかよ！」
いじめられっこの、愛。

それを見てみぬ振りは出来なかった。それが、幼馴染みとしての義務であろうと無かるうと、充弘は黙っていられなかった。しかし、元来気が強かった愛にとっては大事には至らない。頭の良い愛の言葉は逆に独りで立ち向かうことが出来るくらいに強烈であつたから。「充っちゃん。私へ平気だよ。たかが、体育の授業に出れないからって、私をいじめようとする方がバカなんだから！」

事実、マラソン大会を休んで見学している愛は、周りの子から隔離されているかのようで、惨めな思いをしているのは本当だった。出来れば、一緒に走って、完走してみたいとさえて思ってる。それが夢だった。

普通の子と変わらない自分を追い求めても仕方がない。生まれつきの自分の体質。

だけど、この事は悟られてはならないとさえ思っていた。でも、充弘は見抜いていたのだろう。

「愛？強がつてるのも良いけど、俺以外にも友達作れよな？俺が居なくなったらどうするつもりなんだ？」

転校することを、この時、充弘はもう知っていた。だから、忠告もかねてそう言った。

「平気。充っちゃんが居ればそれで私は満足なんだもの。当たり前障りのない言葉を口に出して、好かれようなんて思っても無いもの」

愛は笑顔で答える。

「そんなんじゃ、一生後悔するぞ？悪いことは言わないから、友達を作れ！」

充弘は、これだけが心配であった。残していく愛のこと。一人の友達を大事にすることは確かに大切なことだ。だけど、社会に出たら、そうは言ってはられないから。

「良いの、私は。外で働くようなタイプじゃ無いから……私は充っちゃんのお嫁さんになればそれで良いもの！」

充弘の顔が、ボツと赤く染まった。素直すぎる愛の言葉は、充弘の心を動かすだけの原動力を持たせた。

「それ……何でもない……」

愛の手を引いて、次の授業に導く。ずっとうして手を繋いでいたかった。それが叶うなら。

手紙は、引っ越してから一週間後に届いた。茶封筒に真つ白な罫線のみに書かれた、質素な手紙。それは充弘らしくて愛は笑った。愛は直ぐにその返事を書いた。相変わらず、友達が出来ないと。近くに充っちゃんがいてくれたら良いのについて書いて出した。送られてきた手紙。近況状況が書き連ねられている。

毎週出した手紙。近況状況を書き連ねた。

それらは、ダンボールにギツシリと収まるくらいにもなっていた。しかし、ある日を境にパツタリと来なくなったのである。

それでも、愛は手紙を出し続けた。それが住所不明の手紙になって戻ってきたとしてもだ。

あの日から一度も届かなくなった手紙。いつそ九州にまで足を向けようかとさえ思った。

だけど、愛の身体が長旅に耐えられないと悟った両親は愛の意向を聞こうともしないで止めた。

どうして何も連絡をくれないの？その気持ちをおさえきれずに電話をすることに決めた。

充弘の声が聞きたかったから。

#4 消えた少女

「それで、充弘君とは連絡が取れたの？」

五十嵐は、仕事のことも忘れて愛の話に聞き入っていた。ま、仕事といっても、愛しかこの喫茶店にはいないのではあるが。

「電話は通じなかったんです。この電話は、今現在使われておりません。ってね」

通じなかった？

「じゃ、充弘君は一体？」

五十嵐は、愕然とした。そんなアテのない人間をこの場所で待っているなんて……と、まるで新しく生まれ、空に舞い上がって儚くも壊れたシャボン玉のような気分に襲われた。

「だけど私は信じているんです」

愛は、何者にもとらわれない自信に満ちた笑顔で答える。

「毎年この日にここに来てるんだけど、充っちゃんが来なくて……でも、今年は違うんです。そんな予感がするから」

五十嵐にはさっぱり解らなかった。誰がこんなおかしな話をいつまでも信じていられようか？

「ごめんなさい。もう時間になりましたから……」

喫茶店の時計の針は、十二時半を過ぎている。少女は席を立ち上がると、慌てるようにして、入り口へと駆け出していた。

五十嵐は、呆気にとられていた。愛はレモンティーの入ったカップに口をつけることなく勘定もせずに走り出したのであるのだから。その入り口は、今終業式を終えたばかりの女子学生と、昼から勤務するバイト生入って来ようとして今ドアが開かれる。

『カラン、カラン』

入れ替わるように愛は出て行った。五十嵐は、

「愛ちゃん、お勘定！」

愛を追いかけて慌てて、喫茶店の外へと駆け出した。

「あ、マスター？何処行くんですか？」

すれ違ったバイト生は、何が起きたのかを問いただそうと五十嵐を振り返ったが、五十嵐はそれどころではなかった。

無銭飲食で、この喫茶店を出られる訳にはいかない。愛を警察に突き出すことなんてしたくなかったから。その一心で駆け出した。外は春だというのにまだ肌をさそうという冷たい風が吹いている。しかし、五十嵐はそんなことを考えている時間など無かった。

喫茶店の前の道は少し大通りとなっていて、車の往来が激しい。五十嵐の目には今、走っている愛の姿を映していた。歩道はまだ赤だと言うのに、愛はそれさえも無視して飛び出していたのである。その反対側には一人の少年が立っていた。少し焼けた肌に、体格の良いスポーツマンらしい骨格。健康的なその身体が五十嵐の目には好感が持てた。

その少年は、愛を目にした刹那、歩道を飛び出した。その光景を見て五十嵐は、

「危ない！」

丁度左斜線を大型ダンプが突っ込んできた。そのことが目に入っていないのか、気にせず愛も飛び込んでいた。

ダンプは急ブレーキを踏むことなく突っきろうとしていた。もし今ハンドルを切って何とかこの場を防ごうとしても間に合うはずが無い。そう五十嵐は判断した。

ダンプの運転手には、この状況が目に入っていないのか！？

「うわあー！！！」

五十嵐は叫んだ。頭のとっぺんまで響き渡る声。それは恐怖の為に真っ白な空間を感じさせた。その瞬間、生暖かい風が吹きぬけて行った。正確には、ダンプを中心に竜巻が起こったかのような感じであった。

五十嵐は何か起こったのか分からなくて閉じていた目を見開く。空から何かがヒラヒラと舞い落ちてくる。初めは季節外れの雪か

と思ったが、

「桜の花びら？」

五十嵐は、鼻筋に滑り落ちてきたその花びらの一枚を手にとって
いた。それを軽く掌の上で転がす。

こんなことしてられない……愛ちゃんは？

無事でありますようにと祈りながら歩道を見た。しかし、二人の
姿はその場から消え去っていたのである。

「どう言う事なんだ？」

五十嵐は、狐につままれた気分でその光景を眺めるしか出来な
かった。呆然と立ちすくむ。

『バン！』

喫茶店の方から凄まじい音が聞こえてきた。

愛ちゃんと喫茶店。どちらも大切なことであつたが、事故が起き
なくて済んで肩をなでおろすと、無銭飲食だろうと何だろうと、も
うどうでも良くなった。

そして今までいた喫茶店に足を運んだ。

#5 エピローグ

喫茶店は、女学生の一行で賑わっている。

しかし、一人の女学生が一つのテーブルを眺めながら

「驚いたよね？今、勝手にこの窓開いたよ」

五十嵐は、囁かれているそのテーブルに歩いていった。出窓の窓が開け放たれていた。そして、テーブルには上の桜の花びらを繋ぎ合わせた文字が……

『ありがとう』

五十嵐にはハッキリとそう読むことが出来た。

「全ては、幻だったのか？」

不思議な出来事。そして、忽然といなくなった愛。

口をつけられてないレモンティーのカップの中には桜の花児らが一輪ユラユラ浮かんでいた。

確かにいた。

夢ではない現実。

そこにバイト生がやってきた。五十嵐の行動を不審に思った節でもあるように、

「どうしたんですか？マスター……放心状態になって……」

「なあ、木村？さっきお前が入ってきた時、すれ違った少女を覚えてるか？」

「は？少女なんていませんでしたよ？マスター寝ぼけてるんじゃないですか？」

そんな少女は見なかったと、木村は答える。

「そんなはずは無い！ほら、日本人形のような、セーラー服を着た少女だよ！目が覚めるような美少女！」

あんな少女を見落とすはずなんてあるはずが無い。そう、絶対に！「はあ？居ませんよ！……セーラー服といえば、五十年前に二葉女学園がそうだったらしいですよ？うちの母がその卒業生で聞いたことがあります……今じゃ、ブレザーに変わったらしいですけど……マスター、一度精神科にでも行ったほうが良いかも知れませんよ？」

「五十年前！？」

五十嵐は愕然とした。

誰も見てない？今の今まで幽霊と話しをしていたのか？それとも幻覚？五十嵐は、もう一度確かめるように、再び愛が座っていたテーブルへと足を運んだ。

「いらつしやいませ！」

木村が、今訪れた女学生に声を掛けた。

「いつものやつ！」

「はい！ありがとうございます！」

コーヒーマーカーがコポコポと小気味の良い音を鳴らしていた。

「でさ、凄かったんだよ！さっきの風！」

深雪が先に来ていた女学生に声を掛けた。その頭には桜の花びらが付いていた。

「何々？」

興味津々で訊こうとしている雅美。

女学生たちの話題は、より一層華やいでいた。

「突風！あれって、春一番の風なんじゃないかな？これで暖かくなるといいね？」

春一番の風……

それは、愛と充弘の約束の日。

五十嵐はフツとその窓の外を見る。まだ蕾だった筈の桜が花を咲かせていた。

「おめでとう……良かったね」

五十嵐はそう言い残し、全てを受け止めると再び仕事に就く。

「マスター？この席のレモンティーどうするんですか？」

空席なのに、片付けないとこれから入ってくるお客のことを考えて……といった風に木村は小首を傾げて五十嵐に問いかける。

「良いよ。今日はこのテーブルはそのままにしておいてくれないか？」

ちよつとだけ余韻に浸りたい。五十嵐はそんな気分になった。

今頃あの二人は、五十年以上前の約束を果たしに、映画館に向かっていることだろうなと思いながら……

#5 エピローグ（後書き）

本当は、充弘は愛よりも先になくなっているという設定です。でも、それを描くのは躊躇われたので、止めたてます。不思議な話は、不思議な話で終わらせた方が良いのかなと。

でも後書きに書くと、何かな〜かも・・・ですね。

色々想像をめぐらせて見てください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3245d/>

約束

2010年10月8日15時41分発行